繊細な手作業でつくる製菓用絞り袋を、町工場の文化とともに世界に広めたい。

入り組んだ路地に住宅や商店街、町工場が並び、今なお東京の下町の雰囲気を強く残している荒川区町屋。この街で1985年に創業した「せき製袋」は、お菓子作り用絞り袋の専門メーカーだ。

ケーキを生クリームでデコレーションする際などに使用される絞り袋には、繰り返し使用できるプロ仕様のコットン製やナイロン製のほか、使い捨てタイプのポリエチレン製のものがあるが、せき製袋ではすべての種類の絞り袋を手がけている。国内ではかなり歴史が長い専門メーカーということもあり、プロのパティシエから製菓工場、一般家庭まで、同社の絞り袋を愛用しているユーザーは多い。

「祖母の家の1階が工場で、幼い頃の私の遊び場でもありました。袋づくりの横でよくその真似をしていましたね」と語る、代表取締役社長の加藤大博氏。創業者である先代は、加藤氏の大叔母の配偶者だ。元は加藤氏の曾祖父が1920年に興した、絞り袋の口金やクッキーの型を製造する工場に勤めていたが、独立して妻とその姉である加藤氏の祖母との3人で絞り袋の製造を始めたのだという。

子どもの頃から慣れ親しんではいたものの、大学の卒業間際まで仕事にすることは考えていなかったという加藤氏。しかし当時は、リーマンショックに起因する空前の就職氷河期。就職が決まらず悩んでいた加藤氏は、実家に帰った際に先代からせき製袋に来ないかと誘われた。

「先代は高齢でしたが後継者はおらず、そのままではいずれ廃業するしかなかったでしょう。絞り袋の製造は収益の大きなビジネスというわけではありませんが、やめてしまうのはもったいないと思い、後を継がせてもらうことにしました」。

こうしてせき製袋に入った加藤氏は、働きながら将来のビジョンを定めていく。そして、代替わりによって代表に就任した後は、次々と新しい試みに取り組んでいった。そのひとつが生産体制の改善だ。

「入社直後はいつも壁一面に注文書が貼り付けてあって、つくった先から納品していくのですが、生産が追いつかず注文から2カ月かかってしまう場合もありました。ですから、お客様が欲しいときにすぐ納品してあげられるようにしたいと思っていたのです」。

絞り袋の受注数は、洋菓子需要の増減と連動する。夏の時期は、水物といってアイスなどの絞り袋を使わない冷菓が中心になるので、比較的暇になる。

「先代は在庫の数を調整するために、夏の時期は工場を週4日かつ時短での稼働にしていたのですが、それを通常通りの稼働に変えて人手も増やし、暇な時に繁忙期に備えて生産しておくようにしました」。その結果、売上は従来の3倍にまでアップしたという。

さらに加藤氏は、代表就任を機にサンプルを携えて東京都内の洋菓子店を100軒以上回り、絞り袋に求めることなどを聞いて回った。通常、日本の製菓業界では、複数の問屋が介在するのが慣例となっており、メーカーとユーザーが直接取引することはほぼない。展示会も問屋主体のため、メーカーが出展しづらい雰囲気があるという。そのためユーザーのニーズを汲み取りづらいことを加藤氏は歯がゆく感じていたのだ。この際に得た情報は、製品の改善に大いに役立ったという。

「プロが使っている絞り袋は、お菓子の本場であるフランスやドイツのものが多いんです。コットン製の絞り袋は使っているうちに柔らかくなって手に馴染むのが特長ですが、国内メーカーの原料にこだわっている当社の袋はより柔らかく、品質に関していえば決して引けは取りません。しかも、外国製に比べて安価です。そこをアピールできれば、もっとシェアを伸ばせるはずなんです」。

とはいえ、いちメーカーが国内の業界の構造を変えることは難しい。そこで今、加藤氏が目を向けているのは海外だ。

「私は東南アジアによく旅行に行くのですが、行く度に都市が発展していて、洋菓子店を見かける機会も増えています。当然、絞り袋の需要も増えていると考えました」。

すでに、ネット通販関連の業者と打ち合わせも行っている。

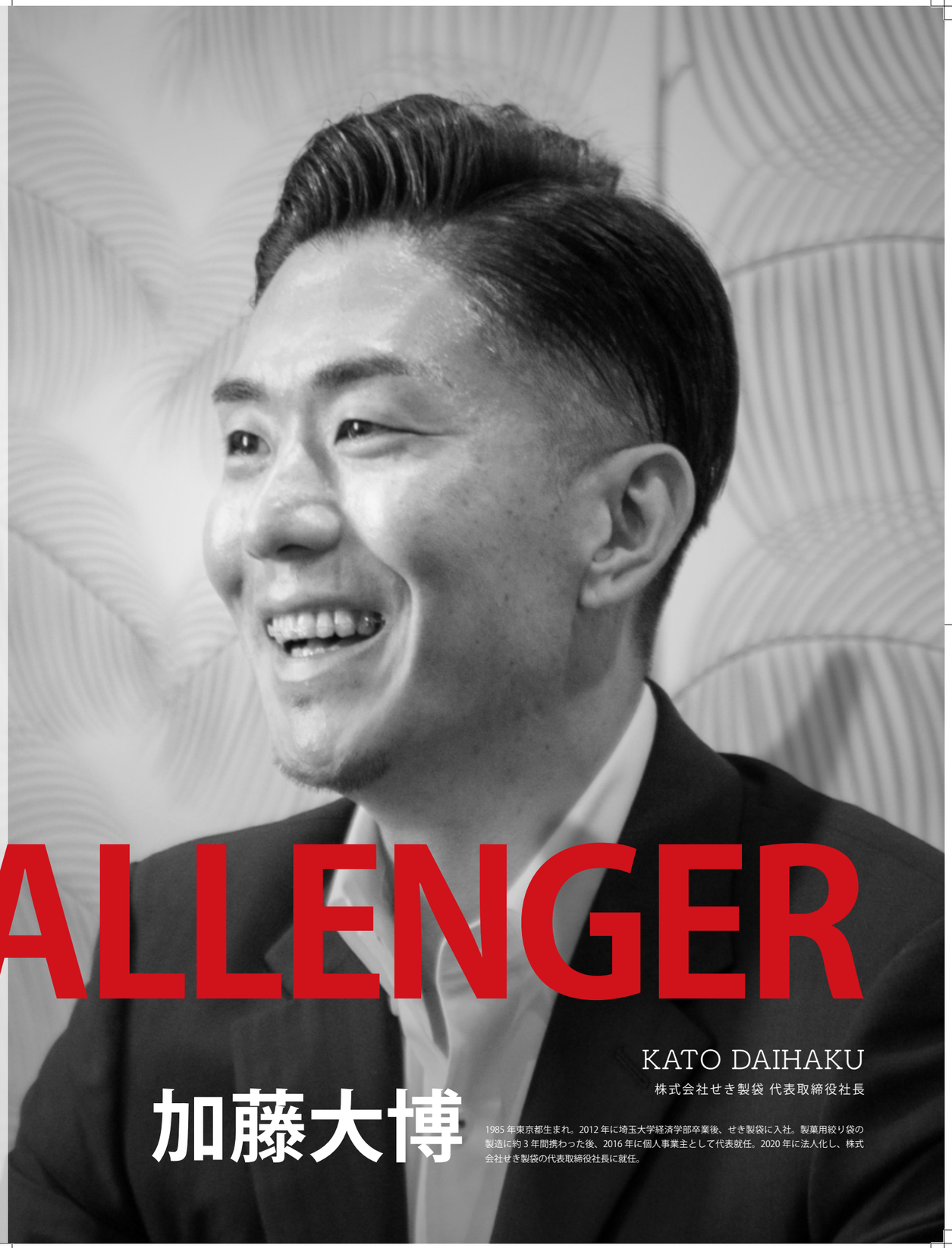
「市場調査を行ったうえでネット販売を始める予定だったのですが、コロナ禍の影響で中断している状況です。ただ、家庭でのお菓子づくりの機会が増えたり、海外製品が入りづらくなったりしたせいか、有り難いことに注文が増えて忙しい。今は現状維持しつつ、知名度をアップすることを考えています」。

2018年に開設したホームページでは、自社製品に加え、町屋の他の工場も紹介している。

「昔はいろいろな町工場があって、機械が壊れたら近所で修理してもらうなど、町内でほとんどがまかなえていました。今は後継者不足で多くの工場がなくなってしまいましたが、うちだけでなく街全体でつながりながら、残っている町工場をアピールしていきたいですね」。

合羽橋の道具街などで自社の絞り袋を手に取っている母と子を見かけると、嬉しさとやりがいを感じると語る加藤氏。1枚1枚手作業で丁寧につくった絞り袋を世に広めるための挑戦は、まだ始まったばかりだ。

株式会社せき製袋 https://www.sekiseitai.jp



CHALLENGER

The Extra Edge
世の中のトレンドをリードする
話題のモノ、ヒト、コトなどを紹介

加藤大博

KATO DAIHAKU
株式会社せき製袋 代表取締役社長

1985年東京都生まれ。2012年に埼玉大学経済学部卒業後、せき製袋に入社。製菓用絞り袋の製造に約3年間携わった後、2016年に個人事業主として代表就任。2020年に法人化し、株式会社せき製袋の代表取締役社長に就任。